異常データに気づくには？

精度保証の後半部分を考える

◎西澤真菜[1)]、森 雅彦[1)]、横山 千佳子[1)]
地方独立行政法人加古川市民病院機構 加古川中央市民病院[1)]

〈はじめに〉

私は生化学・免疫検査を担当している。検査結果報告において、検体採取から報告に至るまでの全ての関係要素を踏まえて、結果を判断する事が、最重要な業務であると考えている。しかし、異常フラグを伴わない結果値や、複数項目のバランスの異常、患者属性からみる異常値など、システムではチェック困難な異常値に対し、技師による「気づき」の差が生じていることが現実であり、問題としている。今回、「気づき」の差を埋めるための当院の取り組みを報告する。

〈目的〉

患者由来ではない異常データに遭遇したとき、担当者として行うべきこと、当直者としてパニック値や異常値の考え方と行う対処を伝える。

〈方法〉

血糖や電解質などのパニック値の振り返りや、患者由来でない異常値を疑った事例を紹介する勉強会の実施。

〈結果・考察〉

検査値に疑問を持つ技師から質問を受ける機会が増えた。これは、検査値を踏み込んで考える習慣が増えたことが理由であり、件数の変化を示す統計数値はないが取り組みの成果と感じている。患者由来ではない異常データの発見状況について、輸液混入の疑い例については、直接医師へ一報を入れ、最終報告の相談を行う手順についても徹底されている。

〈結語〉

検体検査の中でも、特に生化学・免疫検査は、機械化・システム化が進む業務であるからこそ、装置に頼らず結果を判断する知識が必要であると考える。しかし、経験による知識の差は致し方なく、日々の業務の中での積み重ねが重要と考えている。検査結果の傾向や、検体の性状、反応エラーから、患者の状態を想像し、それが実際の診断と合致する結果となったとき、すこし自信が生まれ、２度目の気付きに繋がる。そういう楽しみが検体検査の魅力であることも伝えていきたい。

連絡先　079-451-8666